シンガポール最高司令官リー・クアンユー氏とか言う独裁者から学んだ事

「人間は平等であるべきではない」

シンガポール初代首相リー・クアンユー氏が残した数々の名言の一つです。

たった一代で、シンガポールを世界有数の経済的な繁栄に導いたリー・クアンユー氏は、独裁者でした。

一人の人間が全ての権力を手にする。ナチス軍のヒトラー、ポルポト政権に代表されるように、「独裁者＝悪」「独裁体制では国家は滅びる」と思いがちでしょうが、独裁者自身が圧倒的に有能で、国民の事を大切にする人間だったら、話しは大きく変わって来ます。独裁体制では、決断と行動は素早く行われ、無能で無関心な人間に裁量権が渡る事は無い。

リー・クアンユー氏は頭脳明晰であり、国民の幸せを切に追求した独裁者でした。そんな軍師が居たからこそ、シンガポールの輝かしい今があると言っても過言ではないでしょう。

リー・クアンユー氏は信じていた「人間は平等ではないし、平等ではないからこそ、無理やり平等を目指すべきではないし、人が平等になる事は絶対にない」と。この信念があったからこそ、リー・クアンユー氏はメリトクシー（実力主義、能力主義）を信じた。有能な人間がトップに立ち、国家を導くべし。有能であるならば、国家のために尽くすノブレスオブリージュ（義務）があると。

「独裁政治が必ずしも悪ではない」と言う一つの考え方で気が付いた事があります。それは、日本の会社が繁栄する理由です。

「上下関係やヒエラルキーは良くない」と思っていた私でしたが、権力を持つ人間が有能であれば、十分に機能する。権力の集中によって、社員の自由や決裁権が奪われたとしても、社員に仕事が与えられ、安定と安心が与えられれば、それに満足する社員の方が…日本では多いのかもしれません。

そして、若者の多くが求めがちな裁量権。「With great power, comes great responsibility」とスパイダーマンでベンおじさんが主人公のピーターに言ったように、裁量権を持つには、それ相応の能力スキルと覚悟が必要だなとリー・クアンユー氏の政治哲学を通して、改めて感じましたが、あなたはどう思いますか？